

令和元年6月4日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K01511

研究課題名(和文) 運動指導に直結する動感志向的運動発達論の構築のための基礎的研究

研究課題名(英文) Basic research for construction of motor development theory based on kinesthetic intentionality for movement instruction

研究代表者

佐藤 徹 (Sato, Toru)

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：80125369

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：これまで人間の運動発達の認識法として、動きの測定値が利用されていた。しかしこの方法は、運動を指導するための情報とはなり得ないため、本研究では運動発達を促進させる指導方法論の構築のための基礎的研究を進め、とくに子どもの状況判断力や抽象的運動の達成力など、物理的測定が不可能な発達内容の内実を現象学的視点から例証的に考察した。その結果、動感志向性の分析にもとづく動きの意味の解釈が不可欠であることが明らかとなり、その方法論に言及することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

人間の運動発達の研究の意義は、本来は発達促進の指導法への貢献であるはずである。しかしこれまで、科学的客観性の妄信から測定値だけに基づく運動発達研究が行われてきた。本研究では、その実践的不備を検証し、運動指導に直結する運動発達論の構築には、動感志向性の分析を主とした現象学的視点からの考察が不可欠であることを明らかにした。この認識により、とくに子どもと関わる指導者の運動観察観点は大きな転換を迫られることとなる。

研究成果の概要(英文)：Until now, measured physiological or physical values of motion have been used as a recognition method of human motor development. In this way, however, it can not be information to generate human movements. In this study, therefore, we advanced basic research for the construction of a teaching methodology to promote motor development. In particular, the contents of development that can not be measured physically, such as children's ability to judge the situation and achievement of abstract movement, are discussed exemplarily from the phenomenological point of view. As a result, it became clear that the interpretation of the meaning of movement based on the analysis of movement performer's intentionality essential.

研究分野：スポーツ運動学

キーワード：運動発達 動感 志向性 現象学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

これまで、体育授業やスポーツ指導において学習者の運動発達を理解することの重要性は十分に認識されてはいたが、その認識方法としては速度や距離などの測定データに基づいた研究、あるいは動きの外的特性を比較する研究手法が専らであった。このような物理特性あるいは外部観察的特性から理解できる運動発達内容は客観的に比較可能なデータとして有用な点も確かにあるが、それ以外にも例えば状況判断能力の発達など数値では表せない内容も少なくない。このような数値では表せない、いわゆる不可測的運動発達は、実践においてはきわめて重要な内容であるにも拘わらず、研究対象としてはまったく手つかずの領域であった。それは、物理的变化のように測定方法が確立しているわけではないため、客観的な資料の入手が困難だったからである。“科学的研究”を標榜するあまり、測定可能な項目のみを研究素材としてきたこれまでの運動発達論は、指導者にとって必要な指導素材としてはまったく不十分なものであるといわざるを得ない。

これに対して、近年になって“現象学的運動学”が体系化され、運動の研究は自然科学とは別の研究法、すなわち測定値による研究とは異なる観点から探求する可能性が理論的に正当化されるようになった。この現象学的意味での超越論的妥当性を論拠にする人間学的運動研究の理論に立脚した、運動指導に効果的につながる運動発達論が求められている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、従来の測定値に基づく物理特性的運動発達論を超えた動感志向的運動発達論を構築するための基礎的研究を蓄積することにある。それは、意識をもった人間の行為としての運動発達の本質は、外部からの観察や身体部分の物理的变化だけでは捉えきれないからであり、その点で従来の方法は運動指導に直接結びつく有用な発達論とはいえないからである。これまでは動感志向性を把握する方法が確立されていなかったために、測定可能な内容しか考察の対象となり得なかったが、生命ある人間の行為の研究方法としての現象学を理論的基礎として考察が可能であることを事例的に提示することを通して、指導につながる新しい運動発達論の確立可能性を検証しようとするものである。

3. 研究の方法

運動発達の本質は、測定データなどで客観的に取得できるものではなく、動きの意味を解釈することによって把握が可能となる。どの時点で発達が進んだのか特定することは判断が難しく、数値データの中に人為的区切りをつけるこれまでの方法では妥当性は見いだせない。本研究では、ヴァイツゼッカーが『ゲシュタルトクライス』(1975)の中で、因果系列からは説明不可能な生物学的事象としての行為の統一性を叙述するために用いた「転機(Krise)」分析の方法を用いて、動感発生の契機を把握し、その内容を他者、とくに指導者が理解できるかたちで提示しようとするものである。

具体的には、人間(とくに幼児、児童)の運動発達過程を動感志向的視点から解明するために、行動観察を通して動感発生分析を行う。とくに動感発生の転機を特定する。その際、運動モルフォロジーの手法を活用して、運動を行っている者の動感志向的内実を現象学的超越論の立場から明らかにする。その特性の分類、概念化を通して、運動指導者にとって指導実践に有用な観察視点を明らかにする。

4. 研究成果

(1)運動発達における動きの意味と志向性

機械の動きと異なり、人間の動作は意味を持っている。だから動きの意味を探らなければ人

間の運動の考察とはいえない。

たとえば、物を指でつまむという動作は子どもにとって大きな運動発達であるが、なぜそれが大きな発達であるかは理解できない。ポイテンダイク（1956）によると、つまむ動作というのは慎重さが特徴的に現れるしぐさでありカテゴリー的行動(kategoriales Verhalten)である。つまり、物に対して無防備な態度で臨む乳児にはこのような動作は現れない。持ち上げた後の事態を考えるようになってはじめて現れる行動である。視点を変えて状況の意味を想定するシンボル行動といってもよい。この例から考えるべきことは、運動発達は具体的な運動経過のなかに新しい動きのかたち、つまり運動ゲシュタルトとして現れるが、それを発生させる状況との関連および主体の内的過程を探ることなしには発達の意味をとらえることはできないということである。つまり、外から確認できる物理的变化だけをどれほど正確に把握しても、その運動を実施している主体の志向性の分析を欠いていたのでは真の発達を把握することはできないといえる。機械のメカニズムを明らかにするような方法では、生命ある人間の行為の発生のしくみをとらえることはできない。そこで必要となるのが現象学における「志向分析」である。

日常の動作に対して親がわが子の運動発達に関して志向的分析を施す必要などない。しかし、教師やコーチなど運動を指導する立場の者にとっては、志向性の分析が不可欠であることは言うまでもない。猿と幼児とでは同じつまむ動作が現れても、その志向的意味はまったく異なるように、スポーツ場面でもたとえ外形的に同じような運動経過が現れたとしてもその志向的内実が多様であり、そこに洞察の目を向けない限り運動発達の本質的意味をとらえたものとはいえない。たとえば、具体的目標に直接向かう具体的運動と対置される抽象的運動やボールゲームなどの状況判断力、さらにシンボル化能力などが形成されたかどうかは運動の物理的特性からはまったく理解できない。

運動発達に関する研究は、それが何らかのかたちで運動指導に結びつくことが重要である。意味体系と価値体系に関わりながら達成として実現される人間の行為に対して、意味や価値を捨象して絶縁的に得られた測定データが直接運動指導につながることはない。指導につながる運動発達の査定法を確立していくためには、機械の性能検査的な方法ではなく、人間の生命ある行為を動感論的視点から志向性を分析していく研究が必要である。

（2）志向分析の方法

運動発達の査定においては、物理的に把握できる特性だけでなく、実施者の志向性を理解することの意義が大きいことが確認された。しかし志向性を客観的に測るための装置や基準を示す指標があるわけではない。したがって、物的に特定することができない特性を把握するためには、物体を扱う方法とは異なる認識の方法が必要となる。その方法として抛り所となるのは「転機」という概念である。これはヴァイツゼッカーが、因果系列からは説明のつかない生物学的事象としての行為の統一性を叙述するために用いた概念である。

ヴァイツゼッカー（1975）のいう転機とは、「一挙に別のものとして別の世界に自己を見出すところの自我」があらわれる転回点であり、消滅と生成の同時的展開である。木村（1998）によれば、有機体と環境との出会いのなかで主体性が成立し、その関係が維持されるためには出会いの根拠となっている主体の原理が無意識にそれ自身を変化させ、古い原理が捨てられて新しい原理が獲得されることによつてのみ可能になると言う。このような変化の節目がヴァイツゼッカーの意味での転機である。転機を感じ取って、その前後の変化を比較する区別の仕方は、物理的連続性のなかに何らかの人為的区切りを入れて分類する仕方とは根本的に異なる区別の仕方である。

しかし、転機を見抜くことがいつも容易であるとは限らない。自転車に乗れるようになったり、鉄棒で逆上がりができるようになったりすれば、そのとき大きな運動発達があったことは本人も周囲の者も間違いなく分かる。しかし、それはその運動ができたという結果からの判断であり、実施者の動感における転機をとらえたものとはいえない。動感志向性における転機、いわゆる「動感志向的転機」を見抜くことは誰にでもできることではない。そこには一定の能力が要求される。それゆえ、指導者には動感の発生を転機としてとらえるための発生運動学の意味の観察能力(金子, 2005)を形成する努力が求められる。

(3)動感志向性を読み解く専門能力

運動発達における動きの意味理解、および実施者の志向性の把握などは現象学に基礎を置く身体知論、動感論的運動学に依拠している。現象学的運動学においてとくに重要なものは運動発生であり、その理論的基盤はフッサールの発生的現象学に遡ることができる。前述したように、運動発生は、“鉄棒で逆上がりができるようになった”といったような外面的なできごとだけでなく、“先取りができるようになった”などといった動感転機としてしかとらえることのできないできごとまで含むものである。そのため、それらの意味を文字通り「読む」ためには、視覚的能力を越えた専門的な眼力が必要となる。この眼力はいわゆる「身体で動きを見る能力」である。これは、動きを観察している者自身の動感にもとづいた運動観察のしかたである。この能力は見る者の動感意識に大きく依存する。水に浮かんだときの快感を体験したことのない者に水泳の感覚を理解することは不可能である。

西田幾多郎の「行為的直観」にみられるように、「身体で見る」「物を身体的に把握する」観察態度は、わが国では古くから重要視されてきた。見ることと行うことの一体性、つまり「直観から行為が生まれ、行為によって新たな直観が生まれる」(櫻井, 2007, p.123)という行為的直観は、体育・スポーツの世界ではあたりまえの事象である。スポーツの運動をわれわれが見るとき、自分の行為を関与させないで見ることはあまりない。したがって、観察力を高めるには自分の運動に関する動感意識を理解する能力が大きな意義を持つてくる。「見る訓練」は自らの動感を理解することと並行して発達する。

以上のことから、運動発達の理解が運動指導につながるためには、測定による物理指標ではなく、実施者の志向性を読み解く動感分析に基づく知見の活用が不可欠である。本研究は、このことを実際の運動例から具体的に説明したものである。

<引用文献>

Buytendijk, F. J. J., Allgemeine Theorie der menschlichen Haltung und Bewegung, Springer Verlag, 1956

金子明友、身体知の形成(下)、明和出版、2005

櫻井歓、西田幾多郎 世界のなかの私、朝文社、2007

ヴァイツゼッカー：木村・浜中訳、ゲシュタルトクライス、みすず書房、1975

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

Sato, Toru, Sinn der falschen Bewegungen- Verstehen der "jetzt von den Lernenden gelebten Welt", Turnen trainieren und vermitteln, Andrea Menze-Sonneck & Thomas Heinen (Hrsg.), Czwalina, Hamburg, 2019

佐藤 徹、創造的コーチング研究のために - 事例から理論へ - 、コーチング学研究 29(2), pp.13-20、2016

〔学会発表〕(計 4件)

Sato, Toru、Sinn der falschen Bewegungen - Verstehen der "jetzt von den Lernenden gelebten Welt"、Internationale Jahrestagung dvs der Kommission Geraetturnen der Deutschen Vereinigung fuer Sportwissenschaft (Goettingen, Germany)、2018.9

Okuda, Tomoyasu、Sato, Toru、Growth Trends in Agility Evaluated by a Novel Agility Test, N-Challenge, in Japanese Elementary School Children、European College of Sport Science (Dublin, Ireland)、2018.7

佐藤 徹、運動の自己観察における気づきの構造 - 動きの違いに気づくことのできる選手の養成に関する現象学的考察 - 、日本コーチング学会、2018.3

佐藤 徹、事実から理論へ - コーチング研究におけるアブダクション、日本体育学会、2015.3

〔図書〕(計 3件)

佐藤 徹、大学教育出版、現象学的スポーツ運動観察論、2018年

日本コーチング学会、大修館書店、コーチング学への招待、2017年、pp.98-109

奥田知靖、佐藤 徹、クラウス・ロート、創文企画、子どものボールゲーム指導プログラム パルシューレ - 幼児から小学校低学年を対象に - 、2017年

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。